

教育学部実習地の概要と年間の取り組み

著者	新地 富一
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	15
ページ	36-37
URL	http://hdl.handle.net/10232/9684

教育学部実習地の概要と年間の取り組み

新地 富一

(教育学部実習地)

I 概要

鹿児島大学教育学部鴨池実習地は、教育学部の附属施設として、鹿児島大学郡元キャンパスの東南端部の位置にあつて教育の各講義、研究棟、附属幼稚園、附属小学校、附属中学校に隣接し、面積は約 3000 m²とやや狭い感があるが、各研究あるいは講義等の庭のような距離に位置するので、利用する学生、教官、児童・生徒あるいは職員にとっては時間的制約を極めて受けにくい利用度の高い良好な環境にある。主な土地利用としては、管理棟（約 130 m²）、栽培分野の講義および実験実習、卒業論文実験、教官実験のための畑地（約 800 m²）、果樹園（約 500 m²）、ビニールハウス（約 600 m²）、樹木観察園（約 300 m²）のほか花壇、作物見本園、教材園も小面積ながら設けられている。特に花壇については、実習地に隣接した約 350 m²学部管理地を花壇として実習地が管理し、四季の草花を栽培して構内緑化ならびに花卉見本園の役割を果たすと共に学生の花壇設計実習の場としても大きな教育効果を挙げている。

II 主な業務

1. 農業および自然教育に関する教育の実践指導

本実習地で行っている実験、実習の基本的形態は、断片的な実験、実習ではなく、種播き、栽培管理から収穫にいたるまでのすべての栽培作業（作る作物の決定をも含めて）を学生自身が行い、すべての生育過程を体験するようになっている。しかしながら受講する学生は、ほとんど専門的栽培に関しては白紙の状態である。したがって前もって学生自身に作る作物の栽培方法を調べさせるのではあるが、どうしても基本的な技術の専門的後押し（手取り足取りの意味ではない。自分で考えさせるという意味である）が必要となる。このことは、教官と技官にとって多大な根気と労力を要することになるが、これを行うことにより学生は自分自身で自主的につぎの作業を考えるようになる。また、専門家と非専門家の違いに気づき、栽培（農業）の本質あるいは栽培の成否について理解するようになるし、膨大な人口を養っている農業の重要性あるいは自然の意味、生命育成（育てる）の意義についても理解を深めることになる。教員養成学部の学生は、卒業すればすぐに訓練なしに教壇に立ち、子どもたちを教えるなければならない。その意味でもこのような実践的、専門的な体験的学習、すなわち実践的教材研究は不可欠のものであると考えられる。

Ⅲ 取り組み

(1) 前期実習

- ①栽培実習（実習説明から栽培方法まで）野菜定植準備（トマト・メロン・ピーマン外約 10 種類）
- ②4月の販売会準備施設営から後かたづけ
- ③生活科（くらしと技術）・・・ミニトマトの鉢植え栽培と管理方法の実習
- ④理科（自然と人間）・・・植物の増殖方法について（挿し木）の実習
- ⑤幼稚園サツマイモ植え付け準備～
- ⑥田植え（荒起こし・代かき b・植え付け）実習
- ⑦花壇作り実習
- ⑧花苗・野菜苗・セルリー・ほうれん草・水菜・たまねぎ・青梗菜・にんじん、大根・竹の子・タマネギ・大名竹の子・ジャガイモ・カボチャ・ビワ・ナス・トウガラシ、ピーマン・トマト・メロン・キュウリ

(2) 後期実習

- ⑨冬野菜播種（ブロッコリー・キャベツ外）・植え付け
- ⑩稲刈り・脱穀・ハウス暖房準備・トマトの受粉調整
- ⑪果樹選定防除
- ⑫農産物販売・・・新米・里芋・小松菜・深ねぎ・ほうれん草・ブロッコリーキャベツ・ジャガイモ・山芋・ショウガ・大根・ニンジン・椎茸